

著者は榎有恒や松方三郎などの山仲間で、大正時代の日本の登山黎明期に活躍した高名な登山家であったが、若くして前穂・北尾根に逝ってしまったために、後世に彼らほどの名を残さなかった。

この本は元々昭和5年に『山—研究と随想』という書名で岩波書店より刊行されたが、後に「研究」を割愛して復刻されたものである。

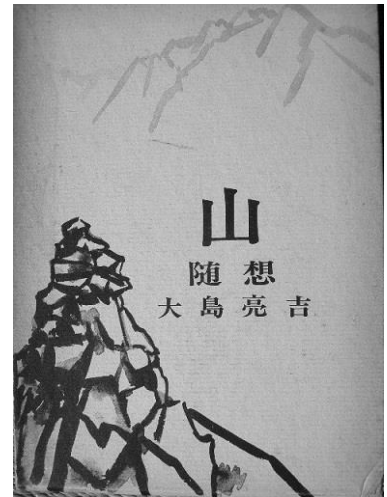
折々の山行記ではあるが、山への思いと思案が随所に散りばめられていて、著者の山への熱い思いが伝わってくる。世上の評価が高い「涸沢の岩小屋のある夜のこと」という章では、著者達の仲間が当時涸沢カールにあった岩穴に潜り込んで、穂高で岩登りをしたり沈殿したりしてのんびりと山を楽しんだ様子が描かれている。

当時の山は一握りの貴族階級の独占であり庶民の感覚とは程遠いものであったろうが、それはそれでまた優雅なものだったであろう。

この章では、山での（遭難）死というテーマが山仲間4人の会話形式で書かれている。同じ山仲間而立山に逝った板倉勝宣の遺稿を引いて「人力の及ぶ限りの確かさをもって地味に小心に一步一步と固めてゆく時に初めていままで夢にも知らなかった山の一面がじりじりと自分らの胸にこたえてくる。……そういうようなやつらにとっちゃあ、山登りは趣味だの、またスポーツだのって思っていないかも知れないぜ」と誰かが言えば、別な仲間が「とにかく、人間が死ぬっていうことを考えのうちにに入れてやっていることには、少なくとも“じょうだんごと”あんまり入っていないからね」という具合に話が展開してゆくのである。後者は板倉が立山で逝った時にその最期を看取った仲間だということから、たぶん榎の言であろうが、彼は続けて「俺はその時以来一層山は自分から離しがたいものとなってしまった。立山は以前から好きな山だったが、あの時からはお一層好きになってしまった」と述べている。また、ママリーの本“Penalty and danger of mountaineering”の中の‘It is true the great ridges sometimes demand their sacrifice, but the mountaineer would hardly forgo his worship though he knew himself to be the destined victim’を引いて、「山登りにはかくかくの危険があり、それはかくかくして避けるが、けれどなお登山者の不幸は絶対には避けられない」と論じている。

世の中の苦勞を知らない有閑貴族階級の放蕩息子達のたわいない戯言に過ぎないと言う人もいようし、若者独特の銜いという人もいよう。しかし、ここで議論されている山への思いや遭難死というものに対する思索は、貴族も庶民もない登山者としての普遍的な認識ではなかろうか。不注意での遭難は別にして、周到に周到な準備を重ねて行った山行でも、それが真摯であればあるほど避け得られない遭難というリスクをゼロにすることはできないという意見は、全く同感に堪えない。

余談であるが、当時の登山用語はドイツ語が基本で、この本にもドイツ語の登山用語が沢山出てくる。私が登山を始めた頃もそうであったので、今読み返してみると懐かしい限りである（現在は英語ベースが主流）。朋文堂新社 1967 年刊。



(2006 年 2 月 記)